

学びの風便り

リーディングスクール通信58 R8.1.28

発行：松本市教育委員会 教育研修センター



学びの改革のあゆみ 寿小学校・開智小学校

寿小学校 子どもに委ね子どもが主役になる授業！

今年度、寿小学校では、これから時代を生きる子どもたちが、自分で考え、選び、学びを進めていける力を育てたいと考え、子どもに委ね子どもが主役になる授業づくりに取り組んできました。

「さあ！やってみよう」を合言葉に、「マイプラン学習（単元内自由進度学習）」を行い、子どもたちはそれぞれのペースや方法で、意欲的に学習に向かう姿を見せていました。

令和7年12月12日には、公開研究会を開催しました。当日は市内の学校からも先生たちが参加し、子どもたちが自分なりの考えをもち、仲間と関わりながら学びを深めていく様子を参観しました。研究協議では、日々の授業づくりにつながる具体的な工夫や気づきが多く共有され、参加者にとって学びの多い時間となりました

公開授業当日「さあやってみよう」と主体的に学ぶ姿！

公開授業では、1年生・3年生・6年生が、それぞれの学年の実態に応じたマイプラン学習に取り組みました。どの学級でも、子どもたちが自分のペースで学習を進めたり、学び方を選んだりする姿が見られ、「さあ！やってみよう」と主体的に学ぶ姿が印象的でした。



子どもたちはそれらを活用しながら、自分なりのやり方で試行錯誤を重ね微調整を繰り返したり、友だちの学びを観察して自分に取り入れたりしながら学びを深めていました。3年生では、国語「4枚の絵を使って」と理科「豆電球に明かりをつけよう」の2教科で、自分なりの考え方で課題解決に向かう姿が多く見られました。6年生では、国語「おすすめパンフレットを作ろう」体育（保健）「病気の予防」の2教科で、学習内容や進め方を自分で見通しながら、友だちと関わり合い、考えを深める姿が見られ、高学年ならではの学びの広がりを感じることができました。

1年生の授業公開を行ったS先生は「今回の公開の授業にあたり、子どもがわかりやすいような動画づくりや教材プリントづくりに一緒に協力してくださる先生方がいて大変助かりました。チームでやるよさを改めて感じました」と話しました。

また、マイプラン学習は公開学年に限らず、全校で取り組んでいます。各学年がそれぞれの発達段階に応じて工夫を重ねながら実践を積み重ねることで、学校全体として「子どもに委ねる授業づくり」が少しずつ根付いてきています。

授業研究会後には、今年度も上智大学教授・奈須正裕先生をお迎えし、ご講演をいただきました。講演では、寿小の先生たちの教材研究に対する姿勢や環境設定の工夫と関連付けたお話を、「教師としての姿勢」や「子どもの学びを支える関わり方」について改めて考える機会となりました。参加者からは、自身の実践を振り返り、今後の授業づくりに生かしていきたいという声が多く聞かれました。

開智小 チャレンジ！学級の枠を超えた「3年生 横割り探究」

～途中も含めて、全てが探究・アウトプットへの挑戦～

開智小学校では、4・5年生での連学年による「縦割り探究」だけでなく、学級の枠を取り払った「横割り探究」も行っています。今回は「まち探検」をきっかけに生まれた子どもの「問い合わせ・思い・願い」を起点とした、3年生の新たな挑戦と、「アウトプット会」の様子をご紹介します。

教室の外にある「本物」との出会い

3年生の探究は、井戸や図書館など、子どもたちが生活する「まち探検」からスタートしました。スタートにあたり、先生方は学年で何度も話し合い、大切にした視点があります。それは、「子どもにとって身近か？」「自分の手足を使って考えられる素材か？」ということです。学年の職員がアイディアを出し合い、目の前の子どもたちの実態に合わせて柔軟に単元をデザインすることで、生きた学びの場が生まれてきました。

A先生が担当した「井戸グループ」。このテーマに興味を持った子どもたちが集まり市内の井戸巡りをしました。味比べをした際、pH値などの科学的根拠では味の違いを見いだせなかった子どもたち。しかし、地域の方の「この井戸が一番おいしいから、わざわざ汲みに来ている」という生の声に出会い、「やっぱりね」と納得する場面がありました。地図がない井戸を偶然見つけたり、道に迷って地域の人尋ねたりする道中のハプニングも含め、「井戸を探すこと・歩くこと」そのものが探究になっていきました。



憧れをモデルに～子どもが本来持っている力～

12月16日、3年生は保護者を招いての「アウトプット会」を開催しました。この準備において大きな転機となったのが、先行して行われた「4・5年生の発表」を見たことでした。「4・5年生の説明が分かりやすかった。自分の発表にも活かしたい」という振り返りからも、異学年の学びが素敵なモデルとなっていることが分かります。「観光グループ」は、観光客にだけ配る予定だったチラシをアウトプットに来た人にも配ることにしました。「図書館グループ」は「伝え方」をモデルに写真やスライドを活用し、「井戸グループ」は参加者を巻き込むクイズや試飲を取り入れました。

支える先生たちの姿～委ねるからこそ見えるもの～

この実践は、先生方にとっても「伴走者としてのあり方」を問い合わせ直す大きな挑戦でした。「とにかく不安しかなく、どう伝えればいいか困った」という本音もありましたが、大人がレールを敷きすぎず、子どもに委ねることで、彼らが本来持っている「自ら問い合わせ・学ぶ力」が見えてきました。当日は、予想外の質問にも自分の言葉で答え、保護者と共に場を創り上げる子どもたちの姿がありました。

この活動を通して、「固定された学級を超え、興味・関心でつながる」ことの意義が見えてきました。子どもたちは似た興味を持つ仲間と楽しみながら学びを創り、教師もまた、担任するクラスだけでなく学年全体の子どもたちと関わることで、多面的な良さを見取ることができました。「簡単にググった情報より、旅先で出会った人から手渡されたパンフレットの方が行ってみたいと思いますよね」。B先生の言葉通り、ネット検索を超えた「実感」と、先生方が信じて任せた「子どもの力」が、開智小の探究を力強く前に進めています。